

「自由学校」の世相史的背景

槌田満文

必要があつて、獅子文六の新聞小説「自由学校」を読み直した。

昭和二十五年（一九五〇）の「朝日新聞」紙上で毎日欠かさず読んで以来二、三度通読したことのある作品だが、このところ戦後世相史を調べているためか、これまで何げなく読み過ごしていた箇所が少なくないのに気づいた。特に、当時のニュースに関連した世相風俗がらみの記述は、新聞小説の特性をフルに生かしたものであるべきだろう。「自由学校」に関する文学辞典などの解説、全集や文庫本に付いた注解は、世相史的背景に触れることが少ないので、その主要な点について考えてみることにしたい。

新聞小説のベテラン獅子文六の作品のなかでも、昭和二十五年五月二十六日から十二月十一日までの「朝日新聞」紙上に「彼女がそり叫ぶには」から「大団円」までの十八章、二百回にわたって連載された「自由学校」は、空前の成功作であった。

世評が高くなりはじめたころの「文芸時評」（「朝日新聞」昭和二十五年六月二十五日）で、河盛好藏は「自由学校」のテーマについて、次のように書いている。「終戦後われわれが自由を与えられてからす

に五年になる。この自由について人々が何を学んだか、いいかえれば、各人がそれぞれの器量に応じてこの自由をいかに生かしたか、ということを探求するのが、おそらく作者の意図するところであろう。『学校』というのはその意味にちがいない。……」
このテーマが世相史的背景とどうかかわるかを考えるために、まず連載期間中の略年表を次に掲げてみよう。

昭和二十五年 5月26日 「自由学校」始まる。

—— 30日 民主民族戦線準備会主催の人民決起大会でデモ。

6月2日 警視庁、東京都内の集会・デモを禁止。

—— 4日 第二回・参議院議員選挙。野党わずかに優位。

—— 6日 住宅金融公庫発足。マッカーサー、吉田茂首相あて

書簡で共産党中央委員二十四人の公職追放を指令。

—— 25日 朝鮮戦争始まる。

—— 26日 「アカハタ」に停刊指令。「チャタレイ夫人の恋人」

押収される。7月8日に発禁。

—— 29日 戦争勃発で北九州に警戒警報発令、灯火管制実施。

7月2日 金閣寺、放火で全焼。

11日 総評(日本労働組合総評議会)が結成される。

15日 小倉市で集団脱走した米軍黒人兵を市街戦で鎮圧。

24日 GHQ、新聞協会代表に共産党とその同調者の追放を勧告。レッド・パージ始まる。

8月10日 警察予備隊令公布。

9月3日 ジェーン台風、近畿地方を縦断、秋田付近で再上陸。

13日 「チャタレイ夫人の恋人」の訳者伊藤整ら、わいせつ文書頒布容疑で起訴。

24日 日大職員への給料を強奪した山際啓之と愛人の藤本佐文を逮捕。

27日 「朝日新聞」潜行中の伊藤律会見記を掲載。30日に神戸支局員の捏造と判明、陳謝の社告を出す。

11月10日 政府、旧軍人の一部の追放を解除。NHK東京テレビジョン実験局、定期実験放送を開始。

12月7日 池田勇人蔵相、米価問題の質問に「貧乏人は麦を食え」の意を答弁、問題化。

11日 「自由学校」終わる。

こうした史的背景を念頭において「自由学校」を読むと、『政治活動の自由』を奪う共産党幹部の追放、『芸術表現の自由』を制限しようとするチャタレイ裁判の二つが、陰に陽にストーリーとからんでいることに気づく。

武蔵野の一角に住むデクノポーの大男南村五百助は「自由が欲しくなったものだからね」と通信社をやめた。それを知って、妻の駒

子は思わず「出ていけ！」と叫ぶ。彼女は翻譯や洋裁などで生計を支えている女子大英文科出の才女だった。大磯に住む叔父の老法学者羽根田力博士の家に相談に出かけ、その時出会ったアブレ・ゲールの堀隆文に熱をあげられたり、英国趣味の紳士辺見卓に好意を寄せたりしたが、やがて失望を味わう。女房に逃げられたシベリア婦りの配給所員平さんのたくましい腕力にひかれたのは、それまでの男たちにはない魅力を感じたからだった。

このような設定は、戦傷で不能となった貴族クリフォード・チャタレイの夫人コニーが、孤独な森番メラーズの肉体にひかれてゆくD・H・ロレンスの「チャタレイ夫人の恋人」のパロディーと見てよいだろう。次の一節にあるように、英語の達者な駒子が戦前に原書で読んでいた設定にも、それは示されている。

「駒子が、妻の自由とか、女性の人権とかいう言葉に、魅力を感じたのは、決して、昨今のことではなかった。彼女は、△チャタレイ夫人の恋人▽という本も、戦前に読んでいた。今更、あわて、眼をサマサ必要はなかった。」(「夏の花咲く」三・第二六回・6月20日。以下同様に章名・回数・掲載日を記す)

「性格と教養の調和と一致なんてことを、クドクドしく持ち出したのは、辺見の量見が、甘いというものである。そんなものは、ほんとうに一人の男を恋する女にとって、アクセサリーのようなものでしかない。男は、そんな小さな宇宙ではない。紳士よりも、森番の方がモテるといえるのは、その証拠ではないか。」(「鮎料理」二〇・第五三回・7月17日)

この年の四月と五月に小山書店から刊行されたD・H・ロレンス作、伊藤整訳の『チャタレイ夫人の恋人』上下二冊が、わいせつ文

書として押収されたのは、朝鮮戦争勃発の翌日——六月二十六日であった。七月八日には発売禁止となり、九月十三日には訳者と出版社主が刑法第一七五条をもって起訴されている。東京地裁での第一回公判は翌二十六年五月八日から開かれたが、この問題はマスコミで大きく取り上げられた。次の一節はその経過の報道に、駒子が関心を持っていたことに触れている。

「大きなミダシで、旧海軍軍人の密輸団一味に、逮捕の手が伸びた記事が、出ていた。こういうニュースは、駒子にとって、あまり、興味がなかった。それより、翻訳書発売事件の経過の方が、面白いのだが、ワキ・ミダシに「お金の水橋下の活劇」という文字がある。それが彼女の眼が、吸いつけられた。」（「檻の内外」三・第一八四回・11月25日）

駒子に一喝されて家出した五百助は、お金の水（お茶の水）橋下のパタヤ部落の住人となって自由の生活を楽しんでいたが、麻薬の取引で愛国運動の資金をかせぐ元海軍軍人の加治木健兵におだてられ、密輸事件の巻きそえを食ってプタ箱にぶちこまれた。思いつめた配給所員平さんが暴風の夜に訪ねてきたのを避けて、大磯の羽根田家に身を寄せていた駒子は、その新聞記事で、地下にもぐって、いた夫の消息を初めて知ったのである。

六月二十五日の朝鮮戦争勃発に先立って、マッカーサー司令部は六月六日、徳田球一、野坂参三、伊藤律ら日本共産党中央委員二十四人の公職追放を指令した。これを契機に、「地下にもぐった」党幹部のなかには、「赤い国」中国へひそかに渡航したものもいたのである。次の一節に「赤い旗の翻つてるような、遠い地区」とあるのは、明らかにこの事実をふまえた記述だったといつてよい。

「すでに、家出以来、百数十日を経た今日まで、いろいろのことがあったにしても、彼が、重い病いにもかからず職寄せ運動にも加わらずに、某所に生存していることは、確実なのである。某所といっても、赤い旗の翻つてるような、遠い地区ではない、東京都内である。」（「自由を求めて」一・第六七回・7月31日）

駒子でチャタレイ夫人をもじり、五百助も地下にもぐった共産党幹部のパロディーとして扱われているのは、時流を諷刺する作者のシニツクな姿勢を示すものであろう。

妻が夫に「出て行け！」と叫ぶことは、戦前ではおおよそ考えられぬことであった。駒子の言動には、男女同権、女性解放といった自由を与えられた戦後特有の進歩性を見ることがができる。しかし、結局は保守性を象徴する人物五百助に屈して、駒子は、プタ箱から出た彼に「敗けたわ……家にいて……」と哀願することになった。家出以前と逆に、五百助が家事に従事し、駒子が会社勤めに出て、元のサヤにおさまったのである。

五百助は「南の風」（昭和16年）の宗像六郎太をうけ、「大番」（昭和31〜33年）の赤羽丑之助（あかば）につながる茫洋とした大型人間で、作者がもっとも愛するタイプであった。五百助の勝利に終わる「自由学校」の保守的性格について、多田道太郎は「自由学校——保守派のみた女の「自由」（「朝日ジャーナル」昭和41年3月）で、次のように論じている。

「戦争があったって、敗けたって、どうしたって、人間というものはそのなかに大きく変わるものではないのだ。また、変つてはいけないのである。そんな保守的信念がこの作家の心の大黒柱なのである。こういう立場から、『戦後』そのものを戯画化し、それが『戦前』

の尾テイ骨をもつ人びとの共感をえたのである。これが『自由学校』をベストセラーにのしあげた最大の理由であった。……」

このような作者獅子文六の立場にもっとも近い登場人物は、同世代の羽根田博士であろう。昭和二十一年十一月三日に公布され、翌二十二年五月三日に施行された日本国憲法について、羽根田の見解を記した次の一節は、作者の考えとほぼ同じと見られる。

「彼は、法学者として、新憲法のある個条に、多少の批判を持たぬことはないが、その方向には、大体、賛意を表しているのである。そのくせ、彼は、それによって、国民の男女が、必ずしも幸福になるとは、考えていなかった。彼は、法律によって保証された自由というものの限度を、あまりに、よく知っているのである。また、自由そのものと、幸福との関係が、直接には結ばれていないことも、長い人生の経験者として、知っているのである。彼は、むしろ、急激に、自由を与えられた若者たちに、惻隱の情さえ持っているのである。……」(「不同調」三・第一五〇回・10月22日)

「自由学校」は、戦前世代の羽根田博士夫妻、戦中世代の五百助・駒子夫婦、戦後世代の隆文と許婚者ユリーという三世代の異なる視点から、進駐軍に占領された終戦直後の世相風俗を、独特のエスプリに富んだ文体で描いている。その主要な世相史的背景について、以下ストーリーの順に、注解の形式で解説することにした。

満数え「細君の駒子——満数えなら三十を越すか、残さぬか。」
〔彼女がそう叫ぶには〕一・第一回・5月26日)——ファースト・シートの駒子の描写。年齢の数え方が満になったのは、この年の一月一日からだった。

可能性の限界「憂きことのなおこの上につもれかし、限りある身の力ためさん——作品が幕末の志士だとすると、まったくカビの生えた歌だが、可能性の限界をきわめるといえば、自殺した有名な戦後青年の心境だった。」(彼女がそう叫ぶには)五・第五回・5月30日)——「憂きことの……」は、アメリカ渡航に失敗した時の吉田松陰の歌。「可能性の限界……」は金融業・光クラブを経営した東大生山崎晃嗣の言葉で、前年の二十四年十一月二十四日に青酸カリ自殺したときに書き遺している。

ギョッ「あの女性的な青年が、慣れ慣れしく、走り寄ってきた時には、駒子も、ギョッという流行語そのものの、驚きに打たれた。」(「五笑会」の連中)一三・第二三回・6月17日)——アプレ青年の隆文に声をかけられた駒子の気持ち。「ギョッ」は二十四年四月から放送されたNHKのラジオ・ヴァラエティー「陽気な喫茶店」で、コメディアン内海突破がはやらせた。

ユリー台風「あの子はユリー台風ですよ。荒れるだけしか、能がないんです。」(「夏の花咲く」九・第三三回・6月26日)——隆文が婚約者の藤村百合子(ユリー)を評した言葉。二十二年九月のキャスリーン台風、二十五年九月のジェーン台風などのように、気象庁は米空軍氣象部隊にならって台風を女性名で呼んだ。講和条約発効後の二十八年から、現行のように番号を付けている。

改正民法「五百助が夏シャツがなくて、困ってやしないかと考えると同時に、彼女は、改正民法のことも考える。配偶者の生死が、三年以上明らかでない時——という離婚規定があった。これには、二年十か月ほど足りない。」(「触手」一・第三四回・6月28日)——家出から二か月たった五百助を思う駒子の心理。新憲法第二四条に基

づいて親族編、相統編を根本的に改めた改正民法は、二十二年十二月二十二日に公布され、翌二十三年一月一日から施行されていた。

漢字制限「人間は——ことに、文化人というものは、言葉使いに、いろいろ細工をするから、漢字制限を受けた小説家ほど、苦痛を感じない。」(「触手」八・第四一回・7月5日)——駒子と辺見のインテリ同士のしい会話に関する作者のコメント。日常使用する漢字を一八五〇字に制限した当用漢字表は、現代かなづかいとともに二十一年十一月十六日に告示された。

テレビジョン「ほんとかしら。ユリーさん、テレヴィジョン持ってるの?」「そんなものなくたって、わかるわよ。あの人、みんな、あたしにシャべっちゃらんですもの。」(「触手」一〇・第四三回・7月7日)——隆文のことを何でも知っているというユリーと駒子の対話。NHKの東京テレビジョン実験局が、週一回、一日三時間の定期実験放送を開始したのは、四カ月後の二十五年十一月十日からだった。本放送の開始は二十八年二月一日。

ブロンディ「いいや、肥る心配をしてるんですよ、うちのブロンディは……」(「鮎料理」六・第四九回・7月13日)——辺見に誘われて訪ねた実業家茂木の邸で、茂木が夫人について駒子に語った言葉。チック・ヤング作のアメリカ家庭漫画「ブロンディ」は、二十四年一月一日から「朝日新聞」に連載されていた。

改正刑法「——ホレたらホレたと、なぜ率直にいえないんだろ。もう刑法にふれるわけじゃあるまいし。」(「悪い日」二・第五五回・7月19日)——へつり腰の辺見の態度に、いらだちを感じた駒子の心境。姦通罪を廃止した改正刑法は、二十二年十月二十六日に公布され、十一月十五日に施行された。

暴走電車「国鉄電車もまた、愉しいではないか。暴走するとか、しないと、か、考える必要があるだろうか。」(「自由を求めて」四・第七〇回・8月3日)——家出して電車出勤の苦勞がなくなった五百助の感慨。中央線三鷹駅で無人電車が暴走した三鷹事件は、二十四年七月十五日に起きた。

名画アルバム「世間で評判のストリップ・ショウが、ハンケチの箱についてる石版画と変わらなくて、意味がなかった。しかし、周囲の客が、画面が変わる度に、カズを飲む気配を起すには、驚いた。やがて、その名画アルバムが終って、場内が明るくなった。」(「自由を求めて」七・第七三回・8月6日)——家出後新宿をブラついた五百助のストリップ見物。二十二年一月十五日から新宿帝都座五階演芸場で開演された甲斐美和による額縁ヌード・ショウ「名画アルバム」がわが国ストリップ・ショウのはしりとされる。

夏時間「よく飲んだもので、夏時間の十七時ごろから、ヒツソリと、町なかの夜気を感じる時間まで、ビールから日本酒と、何本、カラにしたか、覚えはなかった。」(「自由を求めて」二二・第七八回・8月11日)——ストリップ見物で会った男に誘われた五百助の飲みっぷり。五月の第一土曜から九月の第二土曜まで、時刻を一時間すすめるサマー・タイムが、夏時刻法として公布されたのは二十三年四月二十八日で、五月二日午前零時から実施された。二十七年四月十一日に廃止。

笠置シズ子「彼女等は、一斉に笑った。その声が、不思議だった。誰も、笠置シズ子のような、濁みた、太い声なのである。」(「乱世」一三・第一一六回・9月18日)——上野の銭湯で、五百助のいる男湯へ入ってきたオカマたちの声。笠置シズ子が二十二年三月の

日劇で歌った「東京ブギウギ」は爆発的に大流行した。

象徴「必要な時には、こうして下さいと、お願いしますよ。平常は、ただ、わし等の心的、象徴であつて下されば……」（「地下の人」三・第一二〇回・9月22日）——元海軍軍人加治木が五百助にいった言葉。二十一年十一月公布の日本国憲法第一条に、天皇は「日本国の象徴」「日本国民統合の象徴」とある。論議の対象とされるとともに、たちまち流行語にもなった。

ツマミ食い「一人の配給所員から、一人の男性として、平さんが、心に映るようになった。これも、民主主義の感化と考えられるが、それよりも、隆文から辺見へと、精神的なツマミ食いをした後口が、大いに影響したのである。」（「あらくれ」一・第一四六回・10月12日）——配給所員平さんにひかれた駒子の心理。鉱工品貿易公団の公金八千万円を横領した公団出納係の早船恵吉が、元ミス東京の内妻と自首したのは二十五年四月十九日。公団総裁が「あれくらいは女中のツマミ食い程度」と放言したのが流行語となった。

混血児収容所「駒ちゃんはお隣の岩井別荘と、まちがえてるんじゃないのかい。もつとも、あの別荘も、今じゃ、毛色の変つた孤児の収容所になつてるけどね」（「不同調」四・第一六二回・11月3日）——駒子の話をきくために、大磯の別荘くずれの旅館松琴亭で食事をした羽根田夫人の言葉。「岩井別荘」は旧三菱財閥岩崎家の別荘をさす。沢田美喜が二十三年二月一日、ここに混血児救済施設エリザベス・サンダース・ホームを開設した。

肉体の門・国宝焼失「君、少し自重しろよ。肉体だの、門だのというものは、相当、保護の価値があるからな」「国宝だつていうの？ ご安心！ 焼けてなくなりはないわよ……」（「谷間の暴風」

七・第一七三回・11月14日）——五百助を誘つて箱根へ泊りに行くというユリーとの対話。田村泰次郎の小説「肉体の門」「群像」昭和22年3月）は、空気座のロングラン公演や映画化によつて肉体文学ブームを起こし、性の解放を意味する流行語として使われた。法隆寺金堂が漏電で出火、模写中の壁画十二面が焼亡したのは二十四年一月二十六日。二十五年七月二日には、金閣寺が同寺の徒弟僧・林承賢の放火で全焼するなど、国宝の焼失事故が続いていた。

警察予備隊「でも、オベサマは、スパー・マンを怖れる必要はないと思うんですよ。あの男は、この間、配給所をやめて、警察予備隊へ入つたそうですからね」（「谷間の暴風」一〇・第一七六回・11月17日）——浜離宮庭園で、隆文とユリーが、スパー・マンの平さんを恐れて羽根田家にいる駒子のことを五百助に知らせた言葉。警察予備隊（自衛隊の前身）令の公布と施行は二十五年八月十日で、同月二十三日には第一陣として約七千人が入隊した。

九州空襲「オジサマ、見て下さい。これを！」「何を、あわてるのかね。九州に、爆弾でも落ちたのか」（「檻の外」三・第一八四回・11月25日）——新聞で夫の逮捕を知つて驚いた駒子が、羽根田博士と交わした会話。朝鮮戦争勃発直後の二十五年六月二十九日、北九州の米軍基地、小倉・八幡・門司・戸畑の各市に警戒警報が発令され、灯火管制が実施された事実をふまえた発言といえる。

舞鶴でスクラム「シベリアに抑留されたわが子が、舞鶴でスクラムを組んだとしても、生きて還つた事実を知つた母親は、駒子と似た気持だつたらう。」（「檻の外」四・第一八五回・11月26日）——ブタ箱に入れられた五百助に腹を立てながら、無事を知つて一安心した駒子の心境。ソ連からの引揚げ再開第一船の高砂丸が、二千人

のシベリア帰りを乗せて舞鶴港に入港したのは二十四年六月二十七日。すぐ日本共産党に入ったものが多かった。後続船でもしばしば引揚者がスクラムを組んで警官隊とトラブルを起こしている。

以上、社会的事件にかかわりのある「自由学校」の記述の主要なものを取り上げたが、逆に「自由学校」の記述が社会的話題を呼んだケースもある。

新聞小説「自由学校」の評判とともに、一躍東京の新名所になったのは、五百助が武蔵野のわが家を出てから住みついたバタヤ部落のあるお茶の水だった。作中では「お金の水」の名で出てくるこの谷間の部落を、中央線で通勤していたころ「戦後の住宅払底の現象」と眺めていた五百助は「ただ、少し殺風景な気持」（都会の谷間）一・第九三回・8月26日）がしたただけであった。ところが実際に住んでみると、予想外の別天地だったことが描かれている。

二十四年の年末に約四十戸、八十人だった部落が「自由学校」で有名になったころには百戸、百五十人になっていた。立退きを請求した東京都民生局の世話で、二十七年十二月に深川木場のバラック住宅へ移転した際の新聞記事には「自由学校」引越し」（朝日新聞）昭和27年12月23日）という見出しがついている。お茶の水の「文学名所」は、この時から「文学遺跡」となった。

また「自由学校」がはやらせた流行語は特筆すべきものだったといつてよい。「とんでもない」と「ネバー・ハッピー」を合成した「とんでもハッピー」、「好き」を「ネバー」で否定形にした「ネバー好き」などの日米混血語がそれで、駒子が大磯の海岸で出会った隆文とユリーは、次のような奇怪な会話を交わしていた。

「飛んでも、ハッピー！ いけませんよ、ユリーにチャージさせるなんて……」「それが、きらい！ そんな、ヘンな形式主義、ネバー・好きッ！」（「五笑会の連中」一二・第二二回・6月16日）

「てんやわんや」（昭和21年）、「青春怪談」（昭和29年）の「WプラスM」など、獅子文六がはやらせた流行語は少なくない。しかし「自由学校」に登場した「とんでもハッピー」「ネバー好き」をはじめ「キャンデー・ボーイ」「イカレ・ポンチ」などは、昭和流行語史に残る傑作といふべきであろう。

連載当時、朝日新聞社学芸部次長だった扇谷正造の証言（テレビ「名作のふるさと」東京12チャンネル・昭和50年1月6日）によると、これらはいずれもその年の新入社員約三十人に書き出させた三百語ほどの現代学生語の中から作者が選んで用いたものという。

学生仲間だけの新語が、新聞というマス・メディアによって、大流行語に変身したことになる。現存する小さな流行の萌芽を発見して、それを大きく仕立て上げたところに、この作者の鋭い時代感覚を見ることができるといってよい。

また、作中の「キャンデー・ボーイ」が「とんでもハッピー」といった奇怪な新日本語をあやつる現象が、フィクションではなく現実の事件となって現われたのは、まだ「自由学校」が連載中の九月二十四日だった。日大職員の給料を強奪した犯人山際啓之が逮捕された時、「おおミステーク！」と叫んだのが、たちまち流行語となつたのは「とんでもハッピー」の大流行と無関係だつたとはいえない。フィクションの「自由学校」が、世相史の一端を形成することになったケースと見るべきであろう。